

紫 水

創刊号

昭和19年4月 都立第5中学校入学
昭和25年3月 都立小石川高校卒業



は じ め に

A われわれが今年の同窓会幹事を仰せつかったわけだが、さて、どんなふうにするめようか。

B ともかく、日程と会場をまず決めることだね。そして案内状を出して、出席確認をとる。あとは当日の分担を決めておけばいいんじゃないの。

A これまでの経験を尊重して、パーティの準備をするとして、今年はなにかいい趣向はないものかしら。

C 去年は卒業三十周年記念ということもあって、昔の授業を再現して好評だったが、同じことをやるわけにもいかない。

D どうだろう。文集をつくってみたら五中時代の思い出やら、とっておきの話など書いてもらったら面白いと思うよ。

E 原稿が集るかなあ。

D おれは集ると思うんだが。

B 予算の関係からいえば、今年は住所録をつくらなくてすむから、会費のうちから捻りだせるだろう。

A 文集はいいと思うね。集って、飲んで食って話し合うだけでももったいな

いよ。お互いに書けば経験の交流になるし、われわれの学校生活の貴重な記録が残ることになる。

E いつまでにつくるんだい。

C 案内状といっしょに原稿を依頼して、つくっておいてパーティの席上わたすか、パーティの席上よびかけからつくるのか。

D 先につくってしまった方がいいと思う。

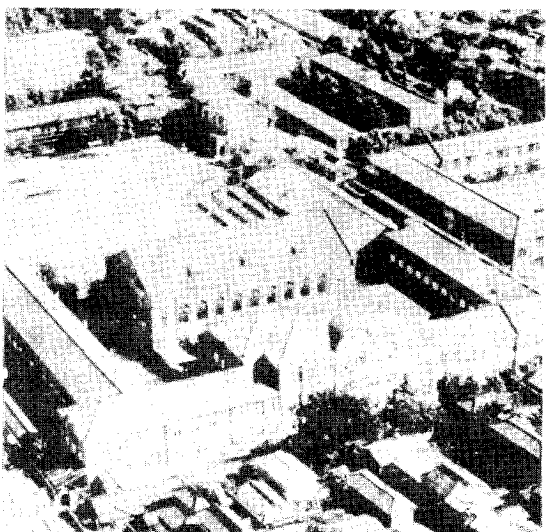
A そうだね。幹事の任期中にまとめなければ責任がはたせない。その線で日程を組もう。

B 字数は八百字前後としよう。

E 先生にも書いていただこうじゃないか。

C 編集とか、印刷所の手配とか、大変だなあ。

A まあ、なんとかなるだろう。とにかく一度つくってみよう。来年にひきつがれていくか、一回きりで終るか、それはみんなが決めることだからね。



はじめに

恩師の部

思い出話の一端	植村利夫	4
海想恩	金津秀一郎	4
同心町の頃	川野健二郎	5
近況	栗和田勝信	6
五中バカ	真田幸男	7
あの頃のこと	竹松宏章	7
物理教室引越しの記	田中光一	8
小石川高の思い出と		
現校長塚田義房先生	富永庸徳	9

生徒の部

断固ノ疎開せず	荒井又治郎	10
冷汗	荒川修	10
一年B組	池田直昭	11
ただ一つの恩返し	石田雅男	12

―得意と失意―

わが小石川高校の思い出

四角いバット	石田満男	13
夢の中の男	井上光央	14
昭和十九年度回想	今中治	14
思い出すことも	大金久典	15
野球部の思い出	大島達夫	16
タイムマシンで溯って	大曾根茂	17
学校に近い住まい	大山忠郎	18
われら一年E組	小野崎順正	19
日の目をみなかった新聞談話	神崎彰	20
むらさき	木島宏	21
開拓三十六号前後	工藤敦夫	22
川野先生とジョイス	葛岡雄治	22
谷鼎先生のこと	黒川大輔	23
鴛籠町の終焉	功能文雄	24
一冊の名簿	小林一郎	24
青年期を小石川で過ごした幸せ	小村三郎	25
小石川の友達	佐々木守	26
	佐藤貞止	27

資料

写真	41
年表	42
校歌	44

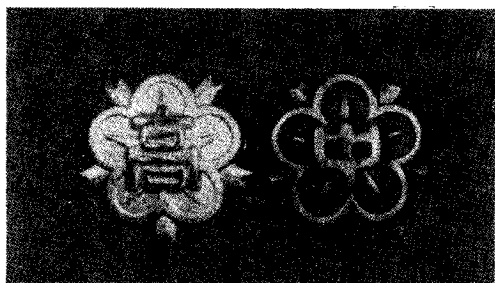
S君への手紙	佐藤純一	28
歴史好き	城座俊夫	29
板妻廠舎での野営	田中稔	30
愚問だよ!!	銅金義人	30
事件	中城まさお	31
母校焼失	早塚守大	32
入学ほどない頃	古畑和孝	33
過渡期	細井弘允	34
思いつくままに	堀敬明	35
青春の証し	松村基生	36
同窓会を思う	望月通	36
航空研究会	森本時夫	37
富士の演習場のハプニング	山田康弘	38
一生徒の断想	東郷昭郎	39

(五十首順)

コラム

授業中止三景	21
五中一家	28

44



思い出話の一端

植村利夫

紫水会のご案内をいただき有難うございました。文面を拝読して最も驚いたのは、皆さんもはや五十才になられたかということ。教師にとっては生徒はいつまでたっても子供でいるような気がしているのです。三十年前のあの美少年達がどんなにかつい顔の親父になつていのかと想像するだけでも愉快であります。とにかく懐旧の情を禁じ得ません。

小石川時代の思い出の中で最も印象に残っているのはジッペル大尉の奇襲を受けた時のことです。その翌日から何日もかけて諸君はサンドペーパーで壁みがきをしたことを忘れないでしょう。全校一丸となって母校を護りぬいたあの時の悲壮な光景こそ、後世への語り草として校史の一頁に特筆大書しておくべきことだと思います。当時私一家六人は八畳一間の用務員室に起居していました。酒豪の沢登校長が時々夜おそくはいつて来て、靴をは

いたまま私達の寝床へもぐりこみ、そのまま寝こんでしまうことがありました。まこと名物校長の名に恥じない大人物でした。先生は私の勤めていた杏林大病院で臨終を迎えられましたので、最後に近いお声も聞くことができました。まことに感無量であります。諸君の在学当時は極端な食糧難の時代でありまして、毎日のようにかなり多数の弁当がなくなる事件が続きました。弁当箱はたいいていトイレの中

で見つかりました。調査の結果、朝食をとらないで登校する生徒がかなりいることがわかりました。今では信じられないことですが、とにかくそんな時代であったのです。当時のご両親のご苦労や皆さんの空腹時代に耐えた話などをお子さまによく話して聞かせて下さい。

私は諸君が卒業した年に麹町中学校の教師に転出し、その後江東区と文京区の中学校長、都立城南高校の校長、杏林大学の教授を歴任、一昨年三月、五十三年間の教職生活に別れを告げました。当年七十二才です。只今は相模原の寓居で自然を相手にのんびり暮らしています。諸君のご来遊をお待ちします。

海想思

金津秀一郎

九月初、晴天、家内と共に房州へ行ってみようと思ひ、久里浜からフェリーで対岸の金谷まで航行した。夏休み直後なので船はがら

空き、船窓から東京湾を往來するタンカー船などをのんびり眺めた。幸い館山行のバスが港に来ていたのでいきなりそれに乗った。保

田の町は小石川水泳寮のある処なので曾遊の地だ。往時を思い出すと懐かしい。ここも旧に依るといいたいがやはり近代化の波をかぶつていた。こうしてバスは館山まで海岸沿いの道をかかん照らす陽光の下、曲がりくねりながら突つ走つた。駅近くでバスを降り、地元に住む旧制高校時代の友人Yを訪ねることにした。

彼も最近、教師を辞めて何やらかにやら生きている人間だ。往年、共に寮生活を三年送つた仲間なので気心は知れている。今ふりかえるとあれから四十年は経つ。海岸近くの砂地に古いもの家が有り、わきに新築の洋風の家があった。今はこちらに住むという。私には古い瓦屋根の家のほうが懐かしい。昭和十二年頃、夏に一週間ほどご厄介になり、彼の家族とも親しく接触した。当時はあの辺を炎天下、二人で闊歩したものだ。

必接間で「よう／＼久しぶりだな」と挨拶。あとは欲談雑談にうつる。我々の家内もまじえて会つたのは初めてだ。これも好いことだらう。車で岬の突端まで案内、さらにまた金谷まで送ってくれた。半島の先きは何処も絶

景だ。茫洋と広い海原が心を壮快なうしめる。車中ではYもよくしゃべつた。ようやく迫る夕闇の空に、三日月が西へかたぶいて見え、かたえに金星だるうか、大きな星がきらめいていた。海はすでに暗い。

同心町の頃

川野健二郎

何か書こうと思つても、いざとなると何もかも忘れていてなかなか思い出せません。そこで妙に印象に残っていることをいくつか書きとめます。

その一。職員会であるとき宴会をしました。それが今ではしかと場所をおぼえていないのですが、駕籠町のどこかだったようです。入口のところ「栄養失調研究所」という看板がかかっています。それから宴が終つて帰りがけにおみやげとし岩塩を一袋頂きました。岩塩はその年の冬たくあん漬けに役立ちまし

主称全圖難 一挙累十觴
十觴亦不醉 感子故意長

明日隔山岳 世事尚茫茫
(贈衛八処士 杜甫 一節)
(昭56・10 記)

たが、あの研究所は一体本当は何なのかよくわかりません。

その二。親しい生徒がヤミで手に入れた洗濯石鹼を売ってくれました。石鹼は貴重品なので大事にしまっておいたところ、一月もしないうちにしぼんでしまつて黒く小さくなり使用に耐えなくなりました。生徒に話したら、水分が多いので白くてやわらかくて大きいうちに使わないとダメなんだと教えてくれました。そうして新たにまたいくつか石鹼を買わされました。

その三。学校のすぐ前の停留所での出来事。都電まちの老人が走ってきた米軍ジープにはねとばされ、口から血を吹いて死にました。死体をのせたジープは春日町の方へ向って走り去りました。

こんなふうには思い出していくとまだいくつもありそうです。しかし、書いていてどこと

近況

今回も意義深い会合にお招きいただきましてありがとうございます。殊に一年だけ在職の私にとってはこの上ないうれしさで感動しております。終戦直後だけに実際にはいろいろ苦労も多かったと思いますが、学校では共々に楽しく元気に学びに精進されたことはそれだけで一人の思い出があるように考えられます。

またこの度は、人生の一番働らき盛りを迎えられ清談懐旧し、激励し合うことができる

なくあわわで物悲しくなります。昭和二十年代の前半とはそんな時代だったのだとおもいます。あの頃はぼく個人にとってもまた時代的にも大きな幻想の時期だったのですが、その底にはどこかユーモラスにさえ思われるほどみじめな現実があったということです。

栗和田 勝 信

ことはおめでたいことと存じます。皆さまの紫水会が、その文集が一段とお互いの気持をひき立たせて、一層有意義なご生活、お仕事にすゝまれますよう、おぼえられている者として感謝をこめて心からお祈りしてやみません。辛い私も以後ずっと高校教員をつとめ、前後四十余年元気にすごしてまいり、いつも若い人々に接してこられたことはかけがえない喜びです。こゝ八年来は講師となり、たゞ教えることに専念し、気楽である反面教え



ることのむずかしさを痛感しています。没頭する専門がないことはさびしいと思いますが、いわゆる雑学にふけり、いろいろな学芸や宗教のことなどを詮索することに興味を覚え、結構口々を忙しくあきずに暮らしています。ひそかになにかを会得したいとは思いつながら日々意をえませんが、健康に恵まれていることだけはありがたいと切に考えるようになりました。「完璧を目指すよりも人間であることを見失わない方が、人間であることにとって重要である」とか、「若い人の間にあっていのちの限り演じて行きたい」とか「声よくば歌はうものを桜散る」などはメモにとりためた寸言の一部です。

以上平凡ながら、なつかしさの余り、心のまゝをのべさせていたゞきました。重ねてご発展をお祈り申します。

五中バカ

真 田 幸 男

生まれたのは下谷の黒門町だが、物どころついてからはずっと小石川育ち、中学時代に本郷に移り住んで、それが終戦の時まで続いた。今の行政区画でいえば、根っからの文京っ子である。小学校は礒川だが、中学から上も、近くだからという理由で五中、一高、東大を選んだ。現今の受験過熱時代の人たちに信じられないことかもしれないが、私の場合、それが嘘もかくしもない真実だ。大学を出て四国のはずれ、イヨのウワジマという町の学校に勤めたが、それも一年半ほどの期間で、母校五中の招請を受けて、四国の学校にはたいへんな不義理をして東京に舞い戻り、それから戦争を挟んだ二十二年間、母校の国語教師であったことは、皆さんよく御承知のとおり。皆さんが卒業されて後、昭和二十七年に校長になることになり、三校ほど都立高校を巡歴したが、最後にまた小石川高校と改称

した母校の校長を引き受けることになり、タイムングよく創立五十周年の式典をわが手で執り行って、四十四年めでたく勇退、三十八年間の教職歴にピリオドを打った。その間、焼け出されて母校の田園寮であった国立の見心寮に転がり込んでいたのが、校長昇任で他校へ出ることになり、泡をくって無理上面の末同じ国立地区にささやかな土地を買い求めて茅屋を建て、それがどうやら終の棲処^{すまか}となった。これも五中との御縁がしからしめた結果

あの頃のこと

竹 松 宏 章

往時茫茫という。思えばあれから三十年余の歲月が流れ、多くの事が忘却の淵に沈んだ。しかし私の教師生活の中で、いつも脳裡に残

って離れないものがある。それは昭和二十三年頃の、小石川高校生の豊かな青春の姿である。それは現在の高校生の姿と対比されるが

故に、一層鮮明なのである。

私が小石川高校に奉職したのは昭和二十三年であった。当時はまた戦後の大混乱の中にあり、米軍の占領下で、食糧事情をはじめ、あらゆる面で市民の生活は最悪であった。米軍教育担当官の指示であのボロ校舎の大掃除をやったのも二十三年であった。しかし市民はそんな悪条件の中で、新しい生き方を模索し、思想的な面でいえば、戦争を阻止できなかった事への反省から主体性論議が盛んに行われた。そうした状況を背景に、小石川高校生の間にも限らない精神の高揚が見られた。

そこでは新しい哲学や文学が語られたし、高度なものへ欲求から、当時の著名な文化人を招いての講演会が文化系各部合同の主催で開かれたりした。創作展にも生徒諸君の積極的な意欲を反映して、高度なものが展示され、中には木下太郎研究という個人展示など、目を見張るようなものまで見られた。そして何よりも印象に残っているのは、学校全体が活気に満ち、生徒諸君一人ひとりの顔が輝いていたことであった。これは高校教育では当然であるべき姿なのだが、三無主義を標榜す

る現在の高校生を目の前にして、そのあまりの違いに驚くばかりであり、何がどこで狂ってしまったのかと暗然とするばかりである。しばらく前、小石川卒業の粕谷一希氏の「二十才にして心朽ちたり」を読んだ。これは戦

物理教室引越しの記

田中光一

昭和十九年四月、当時の物理教室は北側木造校舎の一階にあって、階段教室1、実験室1、機械室1の堂々たる設備であった。教員室は、鉄筋講堂の一階、ちょうど化学教員室と向い合わせにあり、これも一人で住むにはもったいないほどのスペースがあった。

階段教室での授業で思い出すのは、紙に穴を明けて、それを電球で照らし、凸レンズでスクリーンに投影する簡易プラネタリウムの実験である。これにより星座の解説をし、実際の観測を宿題に出した。この時集まったレポートはこれが中学一年かとおびつくりするよ

うな傑作揃い。さすが五中の生徒は、と感心した。もっとも、夜中に毛布にくるまって屋根の上で徹夜をし、風邪をひいたという生徒もいて、気の毒なことをしたが。

翌二十年四月十三日、空襲により校舎もろとも物理教室も灰と融けた金属塊の山となってしまった。流す涙も出ないままに、焼け跡の整理の毎日。飯校舎の明化小学校でも、勉強よりは作業のほうが多かったような気がする。そして終戦。ちょうど陸軍通信学校の建物が払い下げになり、校舎は板橋へ。ここでも物理教室を専用にもらう余裕はなかったが

幸いなことに通信用の兵器がゴロゴロしており、銅線やスイッチ、コンデンサーなどを、拾ってきて、ちょっとした実験をやったりすることができるようになった。

世の中もだいぶ落ちつき、次は同心町の元高等小学校の鉄筋校舎。ここには、高等小学のガラクタ実験員がかなりあり、それを下駄箱を利用した戸棚に詰め込んで、一応念願の物理専用教室と準備室の体裁が整った。

小石川高の思い出と 現校長、塚田義房先生

富永広徳

小石川高に勤務するようになったのは昭和二十二年一月、沢登校長さんの時代でまだ戦後の傷あとが校舎にも、父母の生死のわからぬ生徒もあり多難なときであった。あれから二十二年間、小石川高で理科の教師として色々な思い出があった。そして学校群の出来た年、函国高校へ、昔は五中と三中の仲で大正の震災のときに五中の校舎で授業をやらせてもら

った等々の歴史もあり、両校にも何かよい点で似た処があった。函国高五年で南島師高教頭として着任、そして五年半のうち二年は現校長塚田義房先生にご指導して頂き、現在一橋高校長となりました。何かと言うと小石川高が出てくる。先日、全国PTA静岡大会に参加して記念講演を第四・第八次南極越冬隊長鳥居鉄也先生から承りましたが、鳥居隊

後の錯乱の時代に青春を生きた一人の人物の挫折の物語であるが、私はむしろそこにあの当時のロマンティックな青春の姿を捉え、それが当時の青春だったのだと、改めてなつかしく当時を振り返ったことであった。

長も五中の卒業生で大変有益な講演でした。さて、紫水会の皆さんも昭和二十五年小石川卒でそろそろ五十才の峠を越す頃です。益々世の中でそれぞれの分野で力働を發揮することと存じます。小生も二十有余年の教師生活で紫水会の皆さんの前後の方々が何年後になっても思い出深いものがあり、時折、同心町の校舎の付近を通るときその思い出が一層はつきり浮び出されます。

現校長塚田先生は私が教頭として仕え、本当に男らしい面も思いやりのある方で、小石川高校長として沢登校長に次ぐふさわしい方だと思えます。

塚田校長先生の小石川高校は皆さんが卒業された頃のように一層の発展をもたらすものと思えます。

小生も第二、第三の小石川高校のできることを念じつ、学校経営に当っておりますのでまた何かとよろしくお願い致します。

小石川高校と小石川高校第二回卒業の紫水会の発展と紫水会の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

(東京都立一橋高等学校長)

断固！疎開せず

荒井 又治郎

五中が焼けしたのは二十年の四月十三日だったと記憶している。そのとき、巢鴨にあった我が家も運命を共にした。

知人が中日黒にいたので、取り敢えず仮住居を定めた。しかし、それも五月二十六日に焼け出された。焼け残った同じ中日黒に仮居を見つけたが、なんと、一口置いた二十八日の空襲でそれもアウト。結局、別宅のあった真鶴に疎開した。でも、五中は去らなかつた。毎朝六時十七分、熱海発の列車に乗り込んで東京へ。二時間近くかかった。近くに小田原山学があったのに転校しなかつたのが、今でも不思議ではない。

もっとも、大抵、小田原が大磯あたりで警戒警報を知らされ、途中下車して逆戻りしたような気がする。

終戦までの二ヶ月半、往復六時間の通学時間の間に、家にあった世界文学全集、明治大

正文学全集を読破した。椿姫に涙し、不如帰に胸をときめかせた中学二年。その影響が、五十の心に今なお、ロマンの灯をともしているのか。

冷汗

荒川 修

昭和三十年暮。新米アナウンサーの私は、鹿児島放送局の独身寮にいた。仲間は、錦江湾沿いのこのハモニカ長屋を、與次郎ヶ浜飯場と言った。ベニヤ板の仕切りの五畳半が七つ、二人ずつ合部屋で、三ツ先の部屋でオナラをすると、音のみならず、ニオイまでたゞようという処。

ある雨の夜。突然脚を蹴飛ばされて、痛さ

テレビ局の人は何となく若く見えるねと人からいわれるたび、ニヤニヤ笑いながら、テレビ局に居るから若いんじゃないんだと、心の中で否定し、二時間二十分かかった真鶴―東京間を思い出す。

読書に飽きて、窓外に目を走らせたときの沿線の一つ一つの踏み切りが奇妙に目に浮ぶ。今日この頃である。

の余り飛び起きた。やはり這入ったばかりの

新人記者Sが、ずぶ濡れで怒鳴っている。「事故だ!!トラックが崖から落ちた、行くぞ!!」大きな雨合羽の片足に両足をつっこんだりして、漸く表のタクシーに押しこまれ、時計をみると午前二時。さて、眠い耳に聞けば、鹿児島の南六十キロ程の山川で、崖ツギくずれ工事の作業員十数人が、移動中、百米もの崖から

落ちたという。「六十キロ?!四、五時間か、る!!」昭和三十年頃の道は、鹿児島市中心部の大通りさえ、真中だけアスファルトの、フンドシ舗装。雨の田舎道をすつとんで行けば、命だって危ない。……とぼつては居られないのが放送屋。ラジオの大きな録音機に腰をたゝかれ乍ら、前の席に足をつっぱること

五時間、明け方、現場に着く。取材をS記者にまかせ、病院に飛びこんだ。当時まだハバの利いた放送局という事で、田舎の警官も道をあげる。泥と血で修羅場の病室に、体中ホータイぐるぐる巻の運転手。さすがに院長の許可は得て、ふるえる手で録音機のスイッチを入れられた。「アノ、傷は頭と胸と、足デスカ……」見りゃわかるだろと冷たくこちらを見た運転手、「……」「……」「どういふ風に落ちたんですか?」「……」「その時の様子、覚えてマスカ?」「……」

アブラ汗を流して聞くが、口を結んだまゝ。病院側も警官も、だんだん険しい表情。苦斗十分、(実際は数分だろうが)漸く重い口から返事らしいものを聞けた時は、鹿児島に

気がした。処が、何と……。この返事が全く、片言さえも理解出来ないのである。唯さえ理解しにくい薩摩弁、それに加えて山川地方の方言、事故で興奮しているとあって、アフリカの奥地に来た様なもの。私の言葉は通じることが、あとはヤミ。……焦りと絶望のうちに

一年B組

池田直昭

敗色濃く、警戒警報や空襲警報に悩まされた動乱の駕籠町時代は懐かし、一生で最も印象深い過去である。一度だけ昔に帰る時期が許されるなら、将にあの誇らしげな五中の一年生の生活であろう。潜水艦ほどの様なしくみで沈むのか、などといふ奇問を突破して入学して来た、わがライバル達は、皆、賢

こさうに見へ、何故か、自分だけが、落ちてぼれてゐるのではないかと心配したものだ。でも漢文の時間に、前の席からポルノ寫真が順送りされ、グロテスク(当時は本当にさ

ふと気がつくと、録音テープは既にまわり切って、パタパタと音をたてていた……。

以来、二十数年。今だに、日本語のむずかしさの中で泥まみれの毎日を送っている。そして、ホータイを巻いた運転手の顔が、今でも、夢の中で、私に冷汗をかゝせるのである。

う思った程純真であつたのだ)な局部をまのあたりにして、一日中性の目覚めで、ポウツとしてゐたり、工作室で、余り理由もないのに(きつとそれなりに悪かつたのだらうが)誰かが摸られてゐるのを見たりすると、やはり皆、只の悲ガキにみえ、俺も同じだと変な自信を持って安心したりした。

暗い教室ではあつたが、友達は明るく、尊敬すべき恩師達を、何故か、バケツ、デスマスチルス、ゲツツン、ニヤさんなどとアダ名を誇らしげに呼称し、授業を受け、休み時間

には臭気の強いガス（あれは代用醬油のamiノ酸醜酵の為かと思はれる）が隣りより漂よふ校庭で、元氣一杯ボールを蹴り合った。

私個人は当時敵国語として憎んだ英語が全く苦手で、授業は甚だ気乗りはしなかったが、森ティチャーが好きで、雰囲気だけで英語の時間に付き合っていた。日本が勝てば、世界は日本語になる。だから英語なんて、といふ恐ろしい単純思想であったのである。だから、何故母音で始まる名詞の前の不定冠

詞がaでなくてanなのか、an aerolaneを何故アネアロープレーンと読まねばならぬのかなど、その分析に苦勞した。無理に覚へるには、難儀な発音は日本語的発想で暗記することを思いつき、an aerolaneは、アノ野郎はプレーン、だと仕込んで、授業で指された時得意で読んだものだ、That is コノヤロープレーン、と。〔当時は旧カナ使いだっただうで〕

詞がaでなくてanなのか、an aerolaneを何故アネアロープレーンと読まねばならぬのかなど、その分析に苦勞した。無理に覚へるには、難儀な発音は日本語的発想で暗記することを思いつき、an aerolaneは、アノ野郎はプレーン、だと仕込んで、授業で指された時得意で読んだものだ、That is コノヤロープレーン、と。〔当時は旧カナ使いだっただうで〕

たゞ一つの恩返し

石田雅男

母校が戦災で焼失してから我々は、近所の明化小学校から、北区の第一造兵廠跡へ、そして文京区同心町の小石川工業の校舎へと、転々と移り歩いてきたが、戦災直後の母校焼け跡は、まさに泥棒のメッカであった。腐ったチョコレートのような悪臭のもとで樹木は燃料に、がらくたのなかの容器は家庭用品にと、多くの人々が、あの沢登校長が愛用して

いた雑糞を肩にしながら、もくもくと作業をし、持ち去っていった。なかでも焼け残りの電線や土中の鉛管は、売れば相当の値段になるのか屈強な男が運んでいったが、常習と思われる二人組が、伊藤長七初代校長の銅像を指さして話をしていた時にはビクビクした。そこで父と相談して、隣家のリヤカーを借用してバラックの我が家に運び込んでしまった。

その二人組の唾然とした顔は忘れられない。きつと、同業者にさきを越されたと思ったのであろう。家に持ち帰ったのだが、保管するところがない。律義な父は、物置きを露天に出して漸く銅像は安住の地をかまえたのだが、おかげで、初代校長の遺徳を偲んで存分になでたり、叩いたりすることができたものである。

さて、我々が卒業し、再び同所に母校の校舎が新築されて間もなく、小生は銅像を返還しようとして運び込んだ。迷惑そうな顔をした先生もいたようだが、格別に感謝されることもなく、あっさり置いてきたとき、なぜか銀座カンカン娘を口ずさんでいたことも、妙に記憶に残っている。弟も女房も、ともに母校出身であり、一人娘も佐々木守先生の担任のもとで現在お世話になっている。いつだったか、成田先生から、キミは校門の前に住んでいるのだから、永久門番だネと言われたこともあるが、何はともあれ、ひとつの恩返しが出来たことだと、ひそかに自負している。

得意と失意 わが小石川高校の思い出

石田満男

我々程高校時代を変化に富んだ出来事で綴った者は、数少ないと思われる。戦時中の一時期とは云え、五中時代を含めると、六年間の高校生活を送ったという一事をとってみても、特異な生活体験だったと云えるのではなからうか。ましてや、その間、空襲、焼け出され、青空教室、学校の移転、焼跡整理等々と時代の波に翻弄され、あげくのはては、終戦・敗戦となり、物資不足、食糧不足の生活難、更には、猛烈なインフレと、私のような母子家庭の者にとっては、生活するだけでもヤットという状態で、学業どころではなくなっていました。昼食の弁当の時間に、欠食せざるをえない事も一度ならずあったし、また、持参した弁当も、恥かしくて、蓋も満足にあけられず、ボンボンと喰べた事などは、今でも明瞭に憶えている。私は、長男の立場であったので、高校二年の時から、学校に内証で

アルバイトに精を出した為、この時期以降、学校が仕事か自分でも分らない生活を送り、卒業式もスッポカした私にとっては、高校後半の生活など、とても、学校生活の思い出などとはいえる代物ではない。

学校生活の思い出は、生活も比較的安定していた旧五中時代の思い出である。当時学区制のトップ校だった五中に入り、まず感じた事は、想像以上に優秀な者が集まっているという事と、先生達の意識がすばらしいと思つた事であった。名前をあげる事はさしひかえるが、各クラス四〜五人は、天分豊かな、感受性に富み、人に好かれる性格をそなえ、頭脳がすぐれた者達があり、それは、小学校とは異質な人達と思える程であった。彼らは間違いないく一流の人物であり、将来の日本を背おつて立つ人物であった。私は、その後多くの人々と会い、経験も経たつもりであるが、こ

の考えは、今でも変らない。我々の仲間には、一流の人々であったという事は、どんなにか喜ばしい、誇らしい事であった事か。その後の日本の激動期に際して、彼等も、疎開とか転校とか出入りが数多くあったが、新たに中途から仲間として迎えた者達も、それぞれ個性豊かなすぐれた資質の者達であった。この点では、五中の伝統は、その後の小石川高校に引き継がれたのであった。

私は、心ならずも、最長の期間、五中、小石川高校の生活を送った者の一人として、この事は、大きな誇りと今でも思うのである。

四角いバット

井上光央

春―高校野球、夏―プロ野球、秋―ゴルフ、冬―ラグビーというサイクルが固定して一年の早いこと。特に最近では三、四年が昔の一年分のような感じで経過していき、それにつれて記録される量が著しく減ってきた。スポーツの記録などでも古いことは憶えているが新しい事はすぐ忘れる。老化現象といえればそれまでだが、昔の貴重な記憶が現代の浅薄な情報への侵入を拒んでいるのだろうか。

都立五中の駕籠町校舎とは戦災で焼失するまで僅か一年足らずの付合のだが、断片的な思い出が繋って古い校舎が鮮やかに蘇る。一番端のEの教室、階段教室、開拓館等々。同心町時代ですぐ思い出すのは、故和田信賢氏の講演である。ラジオ番組「話の泉」に関連して、相撲で四角い土俵があった話とか、即時描写力を高めるため都電の中では立って車窓を眺め、看板と店の品物から商売の名前

を喋っていく話など、話術の見事さとともに興味深く聞いた。四角い土俵はなかったが、四角いバットが当時幅を利かせていた。ウルトラ・ソフトボール、つまり軟式庭球を使っている野球に熱中した時代があった。バットは毀れた机の足を利用した四角いもの、握りのところだけは角を削って丸くなった。裸足になって暗くなるまでコンクリートの校庭でボールを追いかけた。四角いバットの感触は思い出すだけで楽しい。木だにスポ

夢の中の男

今中治

ときどき夢のなかに男たちがいる。夢のなかでは、はっきりとその男たちの名前も、な

にを商売にして、私とのかかりあいがある。っているかわかっている。

朝日がさめてみると、夢のなかの男たちの

ことがどうも思い出せないのである。こういう

ったことは、もう十年も前からのことだ。あるときは夢のなかで、その男たちと楽しく笑いあっているが、あるときは、なにか意見や、言っていることの違いがあったの

だろうか、言い合ったり、あるいはいまにもなぐり合いのケンカになりそうになる。そんなとき目がさめてみると、ぐっすり寝たはずなのに、疲がとれていない、あまり爽快な朝ではない。いつかきくと夢でみたままその男たちがどこのだれか正体を見きわめてみたいと思いつづけた。ついに彼らをつきとめることができた。

その方法は、夢で、その男たちとかかわっているとき、「オイ、いま起きるんだ。目をさますんだ」と自らを眠りの世界から呼びよどすのである。

こんなことをいうと不思議だ、と思うだろう。その男たちの正体は、みんな五中の友人であるのだ。

同じ五中に学んだ、というだけで、それはど心と心が深く交わったとも思えない友人た

ーターアナウンサーをやっているというのは同心町校舎の影響かもしれない。

「昭和三十五年、大洋との日本シリーズで高墨のチャンスにスクイズを失敗し、一昨年

も広島戦で同じ失敗をしたことは忘れられない思い出です。……」勇退した近鉄西本監督の取材からの帰途、昭和三十六年、浪人中の西本さんは充電の期間だったね、すべてに前向きで今の新大阪駅の近くにあって毎日自動車学校へも通っていたよ。免許を取ったのは十月の筈だ……」

「ところで井上さん、昨年の首位打者は誰でしたっけ？」

「？ 昔話は老化の現れかも……」

ちも多くまざっているのだ。

戦争だった。

五十才になる男の夢のなかに出てくる顔ぶれが、中学時代の友人たちが多いという事実だが、あの時代、つぎの日学校で友だちと会うことができなかったかも知れないのだ。東京の街が一夜で焼けてなくなってしまっ

五中の友だちはほとんどが十二歳からの付き合いだ。夢のなかに、彼らがいくら出てきてもおかしくはあるまい。

昭和十九年度回想

大金久典

四月。滝野川第八小学校から、野原君と二人で入学。彼の兄さんも五中生だったので、

ストックキング・スタイル等々。

諸先生のアダ名をおそわった。なるほどと思うものが多く、すぐわかった。特に「消防車」は傑作と思った。及ばずながら、自分も今、英語教師として、チャイムと共に教室へとび出す努力をしている。

六月ごろ。小学校時代、唱歌しかやらなかった自分にとって、音楽の時間、ピアノが「ボン」となって、みんなが「ハホト」とか答えるのが驚異であった。この音楽の先生も召集され、まもなく戦死なされたと聞いた。七月ごろ。

新しい友だちばかりの中で、今でもすぐ目に浮かべられるのは、小野君が、学帽を深くかぶって、人の顔を見るのに、上をむいて、ひさしごしにニコニコすることや、岡野君の

富士野に一週間合宿。ノミとシラミに、さんざんくわれた。牛に驚いた馬が兵士をかんで逃げたとか、夕方、わんぱく共を相手に、とうもろこしを売りにくるおじさんから、買

い食いのスリルを味わった事とか、同行された先輩教生の陸十志望とか、多々思い出される。

十月ごろ。

荒川堤防内の学校農園作業。堀った芋が、煮ても焼いてもガリガリだった。

十一月ごろ。

多摩墓地までの夜行車。生まれて初めて右足の裏がつって、途中、中条君とか小山君とか友だちに肩をかりて、やっとの思いでたどりついた朝が忘れられない。

冬、空襲警報。校庭の防空壕。日本の戦闘機が煙をはいて墜落。ジュラルミンの破片に血肉。

三月十日。東京大空襲。続いて四月あゝの五中の校舎も、わが家も空襲で灰燼に帰した。

日々空襲。人間の死に感覚がならされてしまふような中一時代であった。

思い出す事ども

大島 達夫

一、駕籠町時代。空襲に備え、一学年と二学年の始め、学校の留守番に行った。校庭で体格のよい数人とその他の二組に分れ、土を投げをやった。防空壕の土盛の土片は霜で固く、当ると痛かった。宿直部屋でふとん蒸しもよくやった。

一年E組の成績が悪く、担任の田中先生が一人づつ面接してハッパをかけた。

四月十三日自宅が焼けた。学校も焼けた。焼跡に成田喜英先生が無言で立っていられた。

田中先生の疎開の荷物が鉄道の輸送力が落ち、荷物も一杯で仲々出せなかった。積出できる荷主が大塚駅に貼り出されるのを、毎日見に行くのが、私の役目だった。積出の名が出ないまま、先生の荷物は全焼した。

竹村君、城座君の家でよく一緒に勉強した。城座君の新居が茗荷谷の坂に新築された。玄関から見ると一階、中は斜面に沿って、三階

だった。新築直後に、空襲で全焼した。

二、明化小学校時代。夏の暑い日、沢登校長が赴任された。遅刻したので、校長は段上で挨拶中だった。国民服を着た、ひよる長いやせた先生だと思った。

八月十五日終戦の玉音放送。軍事教官の豆炭が、声を出して泣かれた。

二、造兵廠跡時代。消費組合で鯖を配給し新聞にのった。

開成中学と対抗野球試合で、応援団が校旗を先頭に、隊伍をそろえて、堂々と入場して来た。当方も全校応援した。

福島貞太郎（当時ジャパントイズ論説主幹だったか？）先輩が、来校、演説。「軍備のなくなった日本は経済的負担が軽くなり、日本は今後立直る。」との事で、敗戦でお先真暗だった時に、全くびっくりし、深く感銘した。その後、日本はその通りになった。

四、小石川高等学校時代。軟式ボールで野球をよくやった。相沢君、死んだ渡辺君。疎開した旧友、引揚の新しい仲間が、どんなはいつてきた。皆よく出来た。そのためか、進学も全国最高だった。しかし、一年目は岩崎君、相沢君（名前を出す事を許せ）らと落第、もう一年やった。

卒業して、その後三十余年経ってしまった。

野球部の思い出

大曾根 茂

昭和二十一年だったと思う。二年上の田中某氏が教室に現われ「野球部をつくることになった。希望者は集まれ。」との勧誘演説があった。教室は当時借りていた明化小学校の教室、田中氏とは小柄でエノケンに似ていたからか、「タナケン」と呼ばれていた人だった。早速入部。しばらくして学校は板橋の造兵廠跡に移り、そのグラウンドで練習開始。メンバーは五年生が十名以上、四年生が三、四名、わが三年生も三、四名。レギュラー選手は全

しかし、時々昔の事がふっと断片的に思い出されるのは何故なのだろうか。戦争、空襲という、その後はなかった体験の中でも、被害の少ない、どちらかといえば、恵まれた年代だったのか。少年時代を、一緒に、楽しく過ごした素晴らしい仲間達、よい先生方、懐旧の思い出と共に、深く感謝すること、しきりである。

部五年生。四・三年生はすべて練習要員のうなもだった。タナケン氏も闘志満々の捕手で、沈着冷静な根本選手とのバッテリーは見事に息が合っていた。各野手も上手で、強いチームだった。練習試合での勝ちも多かった。しかし夏の予選では二、三回勝った後、一中に敗れた。一中は決勝まで行ったが、高師付属中に敗れ、結局戦後第一回の東京代表は付属中となった。当時は今と違って、国公立中学が非常に強かった。五年生が卒業すると、

わがクラスの入部者もふえ、二、三名の一年上のクラスに代って主力がわがクラスとなった。宮本・松岡・岩田・竜野・城座・片岡・木南・尾崎・佐々木らのメンバーで、一年上の渡辺謙・松岡両投手を軸に相当に強力だった。我々最後の夏の予選では途中で小山台高に6-15で敗れた。小山台高は決勝で慶応高に敗れた。勝った試合は殆ど憶えていないが、負けた試合は不思議と憶えている。公式戦に負けると下級生の時は涙が出たが、高三の時は涙が出なかった。これも不思議なことだった。当時は道具も十分ではなかった。グラブはアンコが殆どはいいものを使っている、バットはひびがはいっていてもテープを巻いて使っている、又ボールの糸が切れると皆で家に持ち帰り補修して使った。駕籠町のグラウンドも小石が多かったが、皆平気だった。部の歴史がなため先輩監督もおらず、上級生が互いに相談して運営していた。高度の技術はなかったが、自由に楽しく野球ができたと思っっている。野球部はその後何年かしてなくなってしまうたようだが、最近では都立高の多くが野球部を持っているようである。夏の東京大会に小石川高の名がないのはいかにもさびしい。復活を切に望みたい。

「タイムマシン」で遡って

大 山 忠 郎

一、一少年老い易く……とは、よく言ったものである。昭和十九年四月、未来への希望と新生活への不安で、胸一杯だった、紅顔の美少年達も今や「人生五十年……」の大台に確実に手が届いた。

毎年一回行われる「我等が紫水会」や学生時代の同期の桜どもと一献傾け、語り合う時は、身心共に誠に気宇壮大である。が、ひとたび家路につけば、榮養満点の故か、身体がでかく、昨今の教育制度のなせるわざか、態度もでかいわが二世共が、我がもの顔にふるまい、いやでも我が老いと時代の流れを嘆く今日この頃ではある。

二、さて、タイムマシンにて紅顔時代に溯ること三十数年、昭和二十年二月十五日、我が家は、鬼畜米英の誇るB29の盲(猛)爆により全焼した。この日、朝方のみぞれまじりの雨は、午後には雪にかわり、非常

に寒くうっとうしい一日であった。午後二時か四時頃、警戒警報にひき続き空襲警報のサイレンが哀しげに尾を引きおわる頃、いきなりドカンドカンと地軸をゆるがす豪音が近づき、ヒュルヒュルという金属音と共に、幾束もの火の矢が空から降ってきた。

三、どこをどう逃げまどったか、やっと人心地のついたのは、当日の夜更けか、母校干駄木小学校前の父母の知人の家で、暖かいもてなしを受けた後であった。

着のままで泥だらけの私達一家五人がお世話になったのは、母の恩師千田に、わの氏宅で、お手伝いさんのあやさん共々、身内も及ばぬ御心遣いを頂戴した。一両日して、早速お見舞いに来られた一年E組担任の田中先生、級友代表木島君等より励ましの言葉と、学用品等、種々の御見

舞を頂いた。

当時、風邪と疲労で寝込んでいた私が、いつものような形でお礼を申し述べたか覚えていないが、今でも、この二つの御恩を想う時、目頭の熱くなるのを禁じえない。

改めて、誌上をお借りして、感謝の気持ちを表わしたい。

四、三十有余年の光陰は流れた。私同様、着のみ着のまま、丸裸かになった母国日本は、奇跡の発展を遂げた。低成長下の世界経済の中で、今や、日本の製品は世界のすみずみ迄行きわたり、先輩格の欧州各国や、終戦直後、先生兼パトロンだったアメリカにひがまれ、あの手、この手でおどしや泣きを入れられている。

我等が二世共の生活ぶりをみても「敵であるぜいたく、そのもの、何んでも欲しいものが氾濫している上にすぐ買える。

豊かな繁栄の中に、何か胸さわぎを覚えるのは、昭和ヒトケタの杞憂の故だろうか。豊かな物質文明の繁栄の中に、精神の荒涼すなわち「他人への思いやり」「我慢」「忍耐」等に欠けるものが、ありはしないだろ

うか。
かくいう私自身も「五中」入学当時の、「お国の為、世の為、人の為」という初心をいつか忘れていたこともあるだろう。

学校に近い住まい

小野崎 順 正

私の家は五中全生徒の中で二番目に学校に近かった。正門を出てそのまま真直ぐ電車通りを渡り、向い側の露地へ入った十軒目くらいなので、一分くらいで教室へ駆けこむ事が出来た。一番近いのはE組に入った根岸で、これは学校の隣なので、とてもかわななかった。工作の時間があるとC組の多くの人が、朝私の家に寄って道具をもってゆき、帰りに置いて帰った。私は前日無理矢理に約束させられて、五人分くらいの道具をふうふう言い乍らかついで登校した事が再々であった。いつかこれが斎藤先生の耳に入り「重い物を持って通うのもこれ鍛練の一つである」とお説教をくらった事もあるが、あずかる道具は一

向にへらなかつた。

疎開あとの片附けに汗を流していたある日ルーズベルトが死んだ。古畑はこれを戸板にチョークで書き、大声を出して道行く人に教えていた。さて話はこれからである。

学校にはこれら戸板、材木が校庭の隅にうず高く積まれていた。春も近いある日、防空当番とかで放課後学校に残っていたのは、C組の中で背の低い方のグループである兼坂・小林三郎・石川淳など十人程(へどういう訳か一年C組ではヤンチャの度合は背の低さに比例していた)で、その中の一人が「小野崎の家の池に蛙の卵が沢山あるので、プールの中に入れよう。これが孵れば面白い事になる」

と提案した。衆議一決・即実行。そのうち「あの戸板を浮べて遊んだら面白い」という事になり、四・五枚程をかつき上げて順番にその上に乗っては、はしゃいでいた。私の順番になり勇躍乗りこんだが、すでに大分水分を含んだ戸板は浮力が少なく、一人分をささえるにやっとであった。ところがである。何と石川淳がその上に又とび乗って来たのである。その勢で戸板はプールの中程迄進み、そしてゆっくり沈み始めた。石川の家は遠い。そして私の家は近い。着替えはすぐ調達できる。私は石川を助ける為に自らプールにとびこんだ。落ちたのでは断じてない。自らとび呉れ、誰かが焚火をたいてくれた。

われら一年E組

神崎 彰

「天下の五中」はぐるりが古びた単色の木造校舎で、その一階のはずれがわれわれ一年E組の教室だった。担任は物象の田中先生。壁一つ隔てて二階へ上る階段があり、関東大震災の直後は、階段下が死体置場にされたためか、夜警をされる先生がそこをさしかかると提灯が急に暗くなり、階段の数が一つ減ったという。これは入学早々五中の七不思議の一つとして教えられた。

中学生は最早、子供ではないと教えられて入学し、事実国防色の制服、長ズボンにゲートル、肩からのズックの鞆姿で、巣鴨駅から上級生の号令に従い隊伍を組んで通学するときはその気を起させられたものである。

われわれが入学した昭和十九年四月は、サイパンの戦鬪が間もなく起きようとしている頃で、戦局は深刻であったが、五中の中には社会からすでに払拭されてしまった伸び伸び

とした空気が生きていた。そこには古き良き時代の香りがあり、「開拓創作」の教えは個性や自主性の尊重と結びついて蘇ってくる。また漠然とした記憶であるが学者志向が暗に期待され、軍人を英雄視することもなかったように思う。それに気をよくしたわけではないが、わがE組の面々は初対面の固さがとれるにつれ、ヤンチャで快活な悪童ぶりを取戻した。最もよく羽を伸ばしたクラスであったかも知れない。

しかしわれわれも国家の要請に応えようとする「時代の子」であった。E組にも一年生で受験できる陸軍幼年学校志望者が少なからずいたため、受験に備えて東洋史のダイジェスト授業が行なわれたことを記憶している。将来の海兵志望者も何人かおり、身長を伸ばすため懸垂に励んでいるという人もいた。及ばずながら私も海軍を夢みる一人で、学内の

船舶研究会を覗いたことがある。航空研究会もあり、会員の某君からそこで学習した機密情報を披露され、日本機の性能に大きな衝撃を受けたこともあった。

しかし、戦争の歩みは予想以上に速かった。比島、硫黄島、沖縄と戦線は後退し、度重なる東京空襲の中でわが五中の校舎も全焼した。その朝私は学校にかけつけ、まだ熱気が残っている校内を歩きまわったことを覚えている。それは良き時代の五中の終焉でもあった。

今や、本土決戦は必至であった。その時、E組に一人の十が起ち上り、愛国の運動を巻き起こすことになる。私達は二年生になっていた。



日の目をみなかった新聞談話

木島 宏

休操の時間、成田先生のお呼びだというので職員室へ行った。先日の際匿物資開放のデモンストレーションについて、生徒の感想を東京新聞が聞きにくるので会ってくれということだった。応接室で待っていると、若い記者が二人きた。聞かれるままに、思ったとおりを答えた。隠匿物資をみんなにわけるのは正しいが、暴動をおこすようなやりかたはよくない。もっと秩序をもってやるべきだ、といったような趣旨だった。

あの日、朝礼の最中に、突然表門の方から群集が鍋や金だらいをたたき、喚声をあげながら校庭をつぎつぎと、倉庫の方へなだれをうって行った。終日騒然とした空気に学校は包まれていた。下校のとき、校門のところでは、大勢で一人の男を取り囲んで激しく追及していた。

空襲で駕籠町の校舎を焼かれた五中は、そ

の頃、滝野川第一造兵廠の青年学校跡に仮住いして、戦後最初の隠匿物資摘発闘争に遭遇したのである。解放感と活気にみち、勉強する落着きをとりもどした学園生活に、社会的激動がいきなり奔流となって流れこんできたのである。戦時中には見られなかった、民衆自身の荒らあらしい集団行動を目撃したことは、五中生にとって大きな衝撃であった。国民は飢えていた。戦争責任はいまいであった。軍隊の隠匿物資を一部の者が横領していることは、公然の秘密とされていた。

だから、いつかは起きる事件である。そういうことは理解できても、当時の私には、社会を変革する大衆の力を理解することができなかったし、飢えた人びとの行動に共感をもつこともできなかった。

記者はメモをとっていた。と、ガラス戸が開いて、三年生が入ってきた。記者がそちら

に質問をむけると、彼は激しい口調で共産党を非難した。休み時間になったのだろう、さらに四年生が数名入ってきたが、みんな興奮して口々に真相を語った。納得がいかなくて、私は口をつぐんだ。

結局このインタビューは、新聞にのらなかった。

日比谷で野坂参三帰国歓迎国民大会がひらかれたのは、その翌日である。学校では鯛の配給があった。朝日新聞が五中の消費組合の活動を取材にきて、教室で鯛を配るところを写真にとった。この方は新聞に出た。

授業中止三景

五中では、伊藤校長の演説と、空襲と、職員会議で授業があたりをくった。

戦前、朝礼における伊藤長七校長の熱弁は立志、開拓、創作の精神を説いてやまず、遠慮なく授業にくいこんだ。戦時中、空襲警報のサイレンがなると授業は中断、悪童どもは一目散に家へ帰った。戦後、組合活動と新しい授業に、先生方の意気込みがたかく、しばしば職員会議が長びいては授業がつぶれた。

むらさき

工藤敦夫

よみ人しらす

紫のひととゆへに むさしのの
草はみながら あはれとぞみる
(古今和歌集 卷一七)
もう三十数年も昔のことではありませんが、よく耳にした歌です。覚えていらっしやいますか。そう、帽子にも、襟にも付けていた校章の由来について説明される時、いつも引用された歌です。

植物図鑑を見ると、六月ごろ、梅雨時分に咲く花ということですから、今「むらさき」について書くのは、季節外れなのかもしれませぬ。しかし、「五中」と聞くと、すぐに思い浮かぶのが、この歌であり、この草なのでこの際お許しただきたいと存じます。
趣味ともいえぬ趣味として、時折、雑木林や草原を歩き回るので、武蔵野の一隅に「かたくり」や「しゅらん」を見かけるこ

とはあっても、「むらさき」を見かけることは、まずありません。白い、地味な花のせいもありましようが、たまにあれば新聞種にもなるほどに、絶滅に近い状態のようです。どなたか見かけられたときには、せひそっと教えていただきたいものです。
ところで、斉藤茂吉が万葉集中の傑作の一

ぼくはクラス会とか同窓会というのが苦手です、その種の会合にはめったに出かけたことがない。
一つには、負い目があって気が重いと

つに評価しているとまで書いている次のような歌があることは、当時、先生方からは教えていただけなかったように思います。教材には向いていないのかもしれませんが、もし教えていただいていたら、「むらさき」のイメージがそのときのように変容したであろうかなどと想像してみたりもしています。
むらさきの にはへる妹を 憎くあらば
ひとつまゆゑに あれ恋ひめやも
(万葉集 卷一・二二)

ている暇がないということもある。その上、近頃のその種の会合の会費もバカにならないということもない。
ところが、だ。小学校時代の同年会というものに出て目からうろこが落ちる思いをしたも

『開拓』三六号前後

葛岡雄治

のだ。はるか昔の少年時代の自分が、その懐古談の中から次第に浮かび上がってきて、ああ、おれはそういうふうなまわりの人間に映っていたのかと再発見をしたものである。三つ子の魂百まで――ごまかせない、こわい、しかし、貴重な証言の数々に脱帽せざるを得なかった。

小石川高のその種の会合にも類かむりをしてきたが、過日川野健二郎先生の勇退と聞いて重いミコシを上げた。そこでもやはり、発見があった。当時のホームルームの古ぼけた回覧ノートを見せられて、記憶がいっぺんによみがえり、冷や汗が全身ににじんだ。

あげくに、母校の教師をしている佐々木君から『開拓』の三六号がみつからないという話を聞いた。それは、ぼくが後生大事に持っている。読み返してみると、ぼくがナマイキなことを書いている。佐々木君も「ドストエフスキーについて」、東大教授の佐藤純一君も「いわゆる社会的実践について」、そのほかあいつがこんなことをとナマイキざかりのアンソロジーだ。

一つの小さな歴史の証言のために、どうも年に一辺くらいは顔を出さなくてはならぬかと宗旨がえを考えているところである。

川野先生とジョイス

黒川大輔

先日、川野先生の定年を機会に同期の有志が集まって先生御夫妻を囲む会を催した。席上、各地から集まった旧生徒達はこどもも立って当時の、川野、像を語ったが、いずれも

社会科や時事問題の授業の想い出や課外活動を指導された先生の姿であった。しかし私にとって先生はこれとは別の一面――文学青年として印象づけられている。

あれは三十数年前のある冬の日の授業の時だったと記憶しているが、先生はJ・ジョイスの「若き日の芸術家の自画像」を紹介されたことがあった。そして先生は、主人公の思春期の悩み、宗教に対する恐れと反抗、芸術の世界への目覚め等について熱っぽく語られた。特に主人公が海辺で美しい少女を見て恍惚とし、この現実の世界の美しさを生き生きと全身に感じる場面は、強烈な印象となって私の脳裡に焼きついて離れなかった。

これが私にとって、現代文学に大きな足跡を残したこの著名な作家との出会いであり、又これが青春時代に耽読した現代英・仏文学への橋渡しの役割をも果たした。

この「若き芸術家の自画像」は、若い頃から何度となく繰返し読んだこともあって、私の愛読書の一つである。そして今日この本を取り出し、読み直して見ると、随所にその時々の想い出が彷彿とするが、同時に、若き日の川野先生の像、が二重写しとなって浮んで来るのである。

谷鼎 先生のこと

功能 文 雄

「男らしく、無邪気に、上品に」、「諸君を紳士として扱う」、「開拓・創作の精神」――入学式の時、井上宗助校長や教頭（はずみをつけて歩くのでスプリングというニックネームと呼ばれていた）の訓示で聞いた言葉が、今も忘れられない。

我々の入学した十九年には、上級生は勤労働員、我々も学校の近くの強制疎開の取り壊し作業に動員されたりした。しかし、あの時代にも、この学校には自由なびのびした空気があった。

谷鼎先生は風格のある先生であられた。目をキュッとつぶってパッと開かれるので、シヤッターというニックネームがあった。教室の出入りの際には、必ず敷居を大きくまたいでおられた。

「漫画はこういう発想があるのかと面白い。探偵小説も先がどうなるのか推理する興味が

ある。何を読んでも良い」と言われた。また「都会人は障書に出くわすとすぐあきらめて引返してしまうが、田舎出はそこでどこか回り道はないかと探す。だから最後は田舎出が先を行く」というような先生のお考えを、授業中、折にふれて話をされたのが印象に残っている。

ある時、「あたしは学位なんか欲しくはな

いよ」と言われたことがあった。先生らしいお考えだと思っていた。しかし、卒業後二十九年に出版された先生の歌集「青あらし」の中に、「学位獲し友らに心ゆらぎしと君にはいはむ若さあらはに」（二十六年作）という歌を見出して、先生の心のゆれを垣間見た思いがした。

「夕やけのにはう落葉路ふみてゆくひとりの人のおしるすがたや」という先生の歌に、谷先生の折々のお姿が思い起こされる。

先生の歌碑は、香川県金乃比羅宮の裏参道を下る途中にある。

加馬籠町の終焉

小林 一郎

昭和二十年の春は今にして思えば大戦も末期であったのだろうが、その雄叫びは、我々中学生の血潮をたぎらせるには十分だった。そんな或日、学校周辺居住者は交代で学校

にとまりこむ事になった。この頃になると、B29の空襲が激化し、あちこちに広大な焼け跡が出現し始め、殊に夜間空襲の恐ろしさは人々に被災の覚悟を迫っていた。こうした事

から、空虚と化した学校を夜間守るには、在校生の手を借りるしかないという学校当局の考えだったのだろう。開拓館の柔道場から畳を、当時唯一の鉄筋建築だった講堂一階の教室に敷きつめ、凡そ二十人位の生徒が毎夜交代で宿泊した。当時学校から左程遠くない曙町（現本駒込）に住んでいた私も宿泊組の一員に指名された。夕食後、防空頭巾にゲートル姿で再登校、何せ顔馴染みが少く心細い上に、すでに勤労働員で工場通いの存じあげない上級生も一緒であった。我々からみると何となく大人の雰囲気であり、一方エネルギッシュで昨今の修学旅行の中学生並みに「蒲団むし」だ、「枕の争奪戦」だと、三十数年前の事でも記憶に新しいのは、もしかすると戦時下に上級生との唯一の交歓だったという理由によるせいかもしれない。そうこうする中に、運命の四月十三日がやってきた。昼間のニュースは、敵米国の大統領ルーズベルトの死去を報じていた。子供心にも日本の劣勢を感じていただけに何か燒痺を期待する気があった。その夜は学校宿直の番ではなかったが、我が家も罹災し又学校も灰燼と化した。

当時の心境は何れ焼け出されるのだからといったサバサバしたものだったし、学校の被災もその夜の中に耳にしていただけに大してショックにも感じなかったが、当夜の泊り組でなくてよかったという言い訳みたいな開放感

があった。明化小学校への移転は暫くしてだったろうか。リヤカーに焼けぼっくりの銃器類を積んで、何人かの友と引張って行ったのを記憶しているが、悲しく、わびしい引越しだった。

一冊の名簿

小林 三郎

私の手元に占ばけた名簿がある。昭和十九年度の紫友会の会員名簿である。黄ばんではいるが戦中の紙のない頃としては上質紙ではなかったろうか。

この名簿の配布をうけたのは、たしか昭和十九年の九月、二学期が始まって間もない頃だったように思う。

古ぼけた木造の校舎、薄暗い一階の廊下に列った教室群、目をパチパチ瞬く組担任の

谷鼎先生、今はなくなった旧二三区や古い地名の数々、デカイ音の理研のサイレン、初めて習った英語の発音と英習字帖、等々、中学一年当時の思い出が一度に噴き出てくる。

あれから三十七年、とはとても思えない、が事実である。どうしてこの名簿が残ったのか、見る度に考えてみるが思い出せない。何もかも昭和二十年四月十三日の空襲で家や一切合切失ったわが家で、どうしてこれが残ったのか、不思議でならない。多分着のみ着のまままで東京を逃げ出したその年の三月末に、私のポケットに入っていたのに違いない。

戦前のものが何一つない私の持物の中で、貴重な持物に今ではなまってしまった。

終戦後、われわれは多数の友人を迎えた。海外からの引揚者や旧軍人、軍属や母校を失

った家族の子弟である。他の都立校が転入試験を実施して少数しか転入を許さなかった当時、無試験で多数の生徒を受け入れたのは、故澤登哲一校長の英断であったと聞いている。

お蔭でわれわれも多数の友を得て、卒業後も毎年かくの如く集って歓びを共にでき

青年期を小石川で 過ごした幸せ

佐々木 守

同期会に出席する度毎に僕も旧友達と親交の度を深めているのですが、現在多様な生き方の中で夫々立場を違えていても、誰もが共通して認め合ふことは、高校時代こそ、今日の自分を自分ならしめているある程度決定的な人格形成期であり、その後どんな変化があらうともこの時期を自分達が小石川で過ごすことが出来たのは本当に幸せだった、ということだと思えます。

僕らが高校時代を其処で過ごした頃の世の中は、戦後の混乱期であって、多くの人々は

国が敗れてもなお自校の都合のみを考える当時の教育界にあって、澤登校長の決断は今こうしてわれの回りに実っている。

ポケットに名簿をしのばせて疎開したとするなら、やはり友を失いたくない本能があるときでも働いたということなのだろうか。

経済的に飢え苦しみ、思想的には価値観の変動に戸惑いながら、社会の民主化、個人の解放という大きな流れの中で、新しい生き方を夫々模索していました。特に僕らにとってこの時期は、丁度青年前期に当り、人間形成の上で極めて重要な時期と重なり合っていました。僕らは「自分は一体何なのか?」という根源的な問題の問い直しから始まり、この世の中で「自分は如何にあるべきか?」等の問題と真剣に取組み、夫々が自我と全体の葛藤に苦しんでいました。

このような時、僕らが過ごした小石川は、

誠に得難く素晴らしい教育の場であったと思います。其処には、ファッションが横行した戦争中でも絶えることなく脈々と続いた自由の精神と個性尊重の伝統があり、秀れた先生方や友人達が多く存在していました。僕らは、経済的な飢えよりはむしろ精神的・文化的飢えにあえぎ、食欲なまでの知的探求心からいながら、様々な行動を展開し始めました。無論、身心共に未熟な当時の僕らが発現した様々な試行錯誤的言動の中には、今日振り返ってみて恥かしい思いのする誤りも多々あり、挫折等もありました。しかし、小石川にはこれを大きく包容する寛容さがあり、また僕らの中にも飽く迄普遍妥当性を求める心と謙虚な姿勢と青年らしい生真面目さがありました。

十余年前、今度は立場を変えて教師として母校に帰った僕は、現在の後輩たる生徒の中に自主性と知的探求心の衰えが一般に見られることを心秘かに憂え悩みながらも、小石川には貴重な伝統や教育方針が少なからず守り続けられていることを知って、大変嬉しく

心強く思っている次第です。

小石川の友達

佐藤 貞 止

締切りを前に晚酌をちびりちびりやり乍ら目を瞑った。小石川の頃を……と想い出したがピンと来ないのに、五中―五高の頃をと思えば直したら記憶がよみ返って来た。校庭と屋上で良くゴムまりで野球をしたが、屋上から目を細くして竹早高校の女の子を追っていた。待てよ、親父と喧嘩して家出し、一晩教室で宿を借りた事もあった。まだある。玉三郎並みの好男子なのに国語だけでなく数学も良く出来たのが居たな(千葉君?)。良く考えてみたら自分も友達を嫁にしていた。

小石川とは余程縁の深い学校である。
さて今を去る三十七年前、当時は学区制とやらで兄の通っていた憧れの五中に入らず、上野中から県立浦中へ、更に巻中(新潟)へ

と戦火を逃れた。何しろ東京で皆が雑炊をすすっている時、白米を食べ、肥えた鮒や鯉を釣って遊んでいたのだから虫の良い話かも知れない。戦後のどさくさ紛れに都立五高にもぐりこんだのだが、その時のみじめな学力は我下らあきれる程のレベルであった。特にこたえたのは英語、否が応でも週三回は巡って来る授業。「君だけ皆から取り残されてもいいのかね」と先生にやんわりやられる同僚の姿を見るにつけ震え上り、英語の予習を無我夢中でやった事を覚えていて。とうとう英語を自家菜籠中(先生の御得意)の域までには

マスター出来なかつたが、かなり身についた事は今でも感謝している。
前出の通り、私は色々な学校を廻って来た

ので、特に五高に感じた良さを一つ。それは「仲間を温く迎える心の広さ」と云おうか、それまで地方巡業で、東京者と白眼視され続けた子供心には、余りにも強烈だった。地方における厭な体験は、疎開と云う戦争がもたらした落し子による被害なのだから止むを得んじやないか……と云えばそれだが、五高に入った時は全く、人間性を取り戻した感じであった。小林三郎、田中稔、大久保一男、橋本陸君などの良き友に恵まれた事は本当に幸であった。小石川後半の重苦しい受験戦争の記憶とは別に、良き友人達に囲まれた五中、五高、小石川は私の学生生活にとって、文字通り最高の住家であった。



S君への手紙

佐藤 純 一

いつも紫水会関係のこまごまとしたご連絡をいただき有難く存じます。お互いに五十の輪を迎える日があるうとは考えも及ばない頃からおつき合いです。少年の日に共有した生活の記憶はその仲間たちと語る時こそ限りなく甘く懐かしいものの、独りで想い起すそれは何とも気恥かしく照れ臭いものです。同期の諸君たちとの会合でいつも感ずるうしろめたさと不思議な興奮の交錯は、恐らく、つかの間の戦線離脱を自らに許し、すねに傷もつ身を互いにいたわり合う共犯意識のなせる業ではないでしょうか。

人は昔からそうした幸福な集りを楽しんできたし、五十男が今さら何の気兼ねも要らぬと居直ることも出来るのでしようが、こうしたひとときをあまりおおびらに自分に許してしまうのはまだ早すぎる気がしてならないのです。

弁解がましいのですが、自分をそうした会合へ駆りたてるのは、旧友たちの人生の軌跡への関心と自己確認の欲求だと思ふことにしています。自分の中でこだわり続けている少年の日の自他についての記憶が果たして客観的な根拠を持つものかどうか確かめたい気持ちに駆られるのです。

つい昨日のことのように鮮かな少年の日々の記憶は自分の中では一直線に現在の自分と一体化し連続しています。自分の当時の幼稚さは「しかたのなかったこと」として、要するに自分は自分であつたと思ひ続けたいのです。想像もつかぬほどの変貌を遂げたかに見える友人ですら、本人からすればそれは当然明白な帰結であり、彼をよりよく知る者にとっては現在の姿こそいかにその人にふさわしいということになりはしないでしょうか。人生の出発点と同じくした友人たちとの会

合には素性のわかった者同士のかもし出す甘い雰囲気があり、それにたまらなく惹かれると同時に、その甘さに身をゆだねることを警戒したくなるのです。とにかく、多くの夢を約束するかに見えるこの会合には打ち克つ難い誘惑を感じます。また諸兄のお顔を拝見するとともに自分の顔もさらして来ようと思ふ次第です。

五中一家

小石川高校の正門と道路をへだてて対峙している石田ビル。その住人である石田雅男君は、われらが紫水会の常任幹事として活躍中であるが、弟さんも小石川高校出身、父君はかつてPTA会長をつとめられた。この程度で驚いてはいけない。石田君の奥さんも、奥さんのお兄さんも小石川高校出身という、文字どおりの五中一家、小石川一族である。まだある。石田君の娘さんは今年小石川高校に入學し、小石川高校出身の佐々木守先生の担任だから、まさに驚き。紫水会の発展は、石田家に負うところが大きいのである。

歴史好き

城 座 俊 夫

人間五十年、化転の内を校ぶれば夢まぼろしの如くなり、一度生を禀け、滅せぬもの、あるべきや。

謡曲敦盛を聞々と謳いつゝ、桶狭間に邁つた信長も、四十九歳で本能寺の変に倒れ、人生五十年を全うすることは、仲々至難のことと思つていたが、元龜、天正の頃はいざ知らず、平均寿命七十余と言われる当節、五十の声を聞いても、想い感うことばかりである。

昭和十九年、一年E組の教室は、古ぼけた木造校舎の東南のはずれにあつた。

もともと学業の方は、自分でも大した期待をもつていなかったが、運動神経は、当時やたらと発達していて、小学校では相撲、野球、徒競走等、何でも来いであつた。

ところが、五中に入ると体操の時間はもとより、休み時間まで蹴球と言うハイカラな運動が盛んで、とまどつたものである。

それでも同好の士が集まり、野球を大いに楽しんだもので、山口正忠君主筆の壁新聞の戦評に、一喜一憂したおほえがある。

中一から中二にかけて、戦争も激しくなる一方で、級友も楯の欠ける様に減り、僅か十数人と言う時もあったが、戦後いくらか世の中が落着きを取戻した頃、蹴球部に入つた。フルバックがいゝだろうと言うことで、専ら相手の脛を蹴ることに熱中していたが、得意の腕力を活かす術がなく、正選手になれる見込は、とてもありそうになかつた。

偶々高一の秋、校内対抗で、エース松岡投手を打ち込んだことから、龍野篤志君から誘われ、野球部に移つた。

丁度その頃だつたと思うが、岡野俊一郎君が疎開から戻り、入団の様に蹴球部に入つた。その後の彼の活躍は衆知のことである。野球部には捕手として入つたが、持ち前の

不器用さから守備位置を転々と、遂にライ卜に落ちついた。

守の方は、からつきしだったが、攻・走の方は聊か自信があり、吾ながら満足のゆく成績であつたと自負している。

当時のメンバーは、次の様に記憶しているが、誤りがあつたらご容赦願いたい。

日本 座 根 野 岡 崎 南 岡
岩 宮 城 大 龍 片 尾 木 松
備 田 石 田 如 中 田 捕 椋

大学では、早大紫水会と言う集いがあり、第一回卒業生の林謙一氏(故人、元毎日新聞記者、NHKテレビ小説おはなはん作者)の知己を得たことは、忘れられない想出である。

いまは、何時までたつても上達しないゴルフと、寸暇を割いて国内の歴史風土を訪ね、旨い肴と酒を求めての小旅行に、無上の楽しみを感じている。

板妻廠舎での野営

田中 稔

今から三十七年前のこととなるとかなり記憶も怪しくなる。おまけに家が戦災に逢ったため、当時の資料が一切残っていないので調べることができない。しかし当時の思い出は意外にはっきりと脳裏に焼き付いているものだ。

終戦前年の昭和十九年四月、背広のしゃれた制服にあこがれて入学した都立五中であつたが、実際は戦争も末期に近かつたため、国防服にゲートル、戦闘帽。敵機の来襲に備えて毎日防空頭巾の持参の立。一度警戒警報発令となると、駕籠町の学校から東十条の家まで歩いて帰つたのであるから驚きである。まさに「為せば成る」の精神であつたわけだ。

確かその年の秋に我々中学生約二百五十人は軍事教練の一環として、全員富士の掘野の板妻廠舎へ二泊で野営に出かけた。昼間は富士の掘野の原っぱで、軍事教官の指導の下、

しい訓練を受けたわけであるが、匍匐運動が一番こたえた。今でも思い出す。

我々が宿泊したのは口輪廠舎といつて、蒙古の包を想像させられるような円形の藁ぶき小舎で、恐らく五十人位が放射状に雑魚寝したわけである。しかも交替で夜中不寝番をさせられた。灯りの乏しい薄暗い中で、一時間経つと懐中電灯で寝顔を照らし乍ら順番に呼び起し、起こされた者は小舎の入口で一時間見張りのため寝ずの番をするわけである。寝ぼけ眼をこすりながら立っていると、あちら

こちらから寝言や歯きり音が聞えてきたり、時折り大声で「お母さん」と呼ぶ声も聞えたが、何んとも言えぬ気持だつた。

また食事かふるつていた。毎食何名か食事当番が出て、調理や配膳の手伝いをしたが、わらびの料理が二度程出た。いわゆるわらびのおひたしである。物資のない折であつたから御飯に味噌汁、しん香にこれが付けば大御馳走の筈であるが、皆一口食べるとそれ以上食べようとしない。軍事教官は見廻り乍らこんなうまいものを君達は何故食べぬと叱る。余り皆が食べないので毒見をした教官、「これは何じゃ。灰汁抜きしてないじゃないか。」二度目は美味しいわらびのおひたしを口にすることが出来た。

愚問だよ!!

銅 金 義 人

「十分の一」これは私の五中在学期間を

他の人と比較した長さです。つまり昭和十

九年四月に入学し、同年十月に父の転勤に伴ない九州の小倉中学に転校したので約半年しか在籍して居らず、五年間いや正確には学制切替で六年在学した人に比べれば十分の一と云う事になります。

この様な次第で、想い出・エピソードがあるだろうと云われても、はたと困り禿げた頭（同級生でまだウスイ人もいるので同窓会では安心してゐるのだが）をなでまわし、しばらく出ずのに苦労しました。その中でたった一つだけ心に残っているものに、入学当時C組の担任であつた谷鼎（この字を書く時は何時も字引を引いて虫目鏡で確認する。チェック）先生の「愚問だよ」と云うのがあります。これは授業の時、中学に入ったばかりの小生意気な、自認「秀才」が、今で云うカッコイイツもりで質問すると、愚問だよと云つて、無視される。よく考えれば分る事とか、ピンボケの質問の時にそれをやられ生徒は恥をかいたのが忘れられません。

それから四十年近くも時は流れ、人それぞれの道に進みましたが、私は地質学を志し大学卒業後は鉱山会社に勤め内外の地下資源の

開発を手がけてきました。外国もカナダ、アメリカ、ボリビア、ペルー、アルゼンチン、パキスタン、パングラディッシュ等十年近くもウロウロしましたが、仕事の余暇に興味である蕃を外国人に教え国際交流に尽力、実は蕃学は語学が下手でも教える事が出来昭和一行族には心をとけ合う格好の材料なのです。

蕃の場合相手が質問したりすると、愚問だよと云いたくなる時もありますが、現地語に

事 件

中 城 まさお

教室も廊下も、数メートルおきに大井板をぶち抜いた。焼夷弾が大井裏にとどまるのをふせぐためである。上級生は勤労働員などに出て、一年生が最上級生になった。学級単位で防空隊のような組織をつくり、交替で放課後も校舎に居残つた。きつちり組まれていた授業も、空襲の頻度が増すとともに函が抜けたように欠落し、どの時間から放課後である

かもさだかでなくなつた。入学当初の桜吹雪と青葉の日々、小学校とは一味ちがう授業に対する興奮の日々から一年も経っていないとは信じられないほどの変容がそこにあつた。少年たちはその変化をはっきり認識しないまま、自分たちを状況に適応させて行つた。防空消火という「重責」を課せられることはむしろ少年たちにとって居心地のよいことだつ

た。暮れなずむ校舎に数人で居残って、それでも日に一回は全校舎を巡回して歩いた。本来なら立入るはずもない上級生の教室を勝手な屯所にして、西側の窓からはいる余光の中でたわむれ合っていた。事件らしい事件は起らなかった。いや、二、三度、廊下のまがり角に脱糞があるのを発見して騒ぎとなった。糞はいつの場合もこつてりと大きく、当時の食料事情にもかかわらず、色つやも臭気も相当なものだった。何者が、いかなる意図でこれを行ったか、解明されることなく終始した。平穩すぎる任務に波紋を投じたことは事実である。

もう一つ事件があった。教人でくるま座になつて性にまつわる話をしていた。ド町から通学している某が、その辺の消息については群を抜いており、大人びた余裕ある態度で、しかも得意さをかくすはずもなく、一座をリードしていた。まわりの者の、おくれをとるまいとする背のびした合の手や、笑い声が、話し手の語り口を過不足なくリードして次々と話を引き出していた。その時、やや一座からはずれてすわっていた一人の少年が、や

は四月十一日の夜であった。その二日後四月十三日(この日は金曜日だったそうである)夜母校五中の校舎は罹災し灰燼に帰したのである。すぐ近くに住んでいた僕は学校付近が被爆したと知るやとんで行ったのだが、既に大火柱と共におびただしい火の粉を吹き上げとても近寄ることなどできない状況であった。道路に電線が垂れ下り火事場特有の強風が吹き荒れて火の粉が一面に舞っていた。それはたまらなく悲しい情景であった。校舎焼失を確認して果鴨方面へ引き返して来た所で、石田雅男とぼったり出合つたことは前にも書いてでたちで、一言「学校も焼けてしまったなあ」と交わした言葉に万感がこもっていたように思う。なおも空襲は続いており、お互その先はどうなってしまうか全く判らない緊迫した状況下での遭遇だったのである。その直後僕の住んでいた家にも火がまわり、着のみ着のまままで布団をかぶって六義園に逃げ込み一夜を明かした。

僕の二度にわたる戦災体験は東京空襲を記録する会の「東京大空襲・戦災誌」第一巻に

わに立って、話し手の某を突き倒し、なぐりかかった。不意をつかれた一同が、ややおくれればせに止めにはいって引きはなすまで、少年は何かを叫んでいるようだったが、何を叫んでいるのか、周囲のものには聞きとれなかった。任務の時間が過ぎていくこともあって、全員気まずい思いのまま家路についた。なぐりかかったのは無口な、幼なきの月立つ少年

母校焼失

数年前紫友同窓会報に五中が戦災にあって校舎が全焼した時のことを書いたことがあるが、僕の戦災体験は母校焼失と共に生涯忘れ得ぬ鮮烈な出来事なので、他にいくらでも五中の思い出はつきないけれどもまたその当時のことを書いてみようと思う。

昭和二十年三月十日の大空襲で本郷・湯島の家を焼け出された僕は、たまたま知人宅をたよって大和郷の六義園近くに仮寓していた。

掲載されているが、それにも五中の戦災のこととはふれてある。しかしこの第一巻第一巻合計八百五十余りにのぼる体験記には何故か他に五中の被災の記述はないようである。先日配られた紫友同窓会報No.8に粕谷一希先輩が四月十三日当夜宿直していた体験を書かれてるのを拝見し、感無量であった。たしかその翌朝だったと思う。学校に集つて来た生徒達を前に教頭の河合先生が情熱をこめてこういう意味のことを訓辞された。「焼けたのはスクールハウスにすぎないのであったのはスクールハウスにすぎないのであって、わが五中は我々と共に残っている。

入学ほどない頃

いざ五中―小石川時代のこととなると、あれやこれやとめどもなく懐旧の念とともに思い起こされて、焦点がなかなか定まらない。ここには、思いつくままに、中学一年はじめ

だったが、これも、動機、目的等不明のまま、むしろ意識的に一同の記憶の片すみに押しやられ、その少年はそれから日も無くして地方へ疎開して行った。ぼく自身もその後疎開し、校舎が焼け落ちたことは、家の罹災のしらせとともに、おぼろげに聞いた。

早塚守夫

二年生になったばかりだったが、三年生以上は動員で在校せず昼間は殆ど我々だけで授業や防空演習に励んでいた。校庭にもいくつかの防空壕がつくられていた。夜は上級生と共に宿直して学校防衛に当たったが、講堂の下の化学教室の向いのあたりの部屋に覺を敷きつめ、大勢で泊っていた。就寝時刻までの間皆でジュエスチャ―遊びなどをして結構楽しかったことを憶えている。僕が最後に宿直したの

決してなくなることはない。五中はほろびない」英語の河合先生のいわれたこの「スクールハウス」という言葉が、今でもとても強く印象に残っている。その後我々は卒業までの五年間に原町の明化小学校、滝野川の造兵廠跡同心町と校舎を転々とし再び駕籠町で学ぶことはできなかった。校名も第五新制高等学校となり、更に小石川高等学校に変わった。しかし五中はあの朝河合先生が諭された通り僕等の心の中に一貫して生きており、ほろびることなく今日まで続いている。

古畑和孝

頃の思い出の中から一、二を。入学試験当日のこと、受験番号を隣り合わせた初対面の某君、面接を待つ間に、私に向かってとうとうと論じ立てた。さすが五中には

たいへんな秀才が受けにくるものだと、私はびっくりしてしまつた。ところが合格発表の日、彼の番号はなかった。

私はC組だつた。入学早々の修身の時間に校長井上宗助先生の国旗に関する質問に、ノッポの長谷川得三郎君が、即座に、「白は純白を表わし、赤は赤誠を表わします。」と答えたのにも、私はびっくりした。そんな象徴的なことなど、子どもっぽい私は未だ考えたこともなかったからだつた。そういえば、級長小林薫、副級長古川敬の諸君もノッポだつた。チビの私は、兼坂晴雄、後藤純兄、小林三郎、木南正、石川淳、今回の幹事小野崎順正……(チビ順)などのチビ仲間と、他愛ないことに一喜一憂したりしていた。あの物資窮乏のとき、カーキ色一色の戦闘帽の中にあつて、木南君の茶色の戦闘帽は異色だつた。習いたての英語を精一杯駆使して、「ブラウン・キャップ」とはやししたりしたものだ。もつとも、私は私で、姉のお古の女学生用皮カバンを持ってさつそうと登校したところ、チビ仲間にはやしたてられて、半ベソをかいたりもした。既にして大人の風格の片鱗をみせて

いた早坂忠君たちに、一体何とバカげたことをとみられているようにも感じて、ちと冷や汗を流したりもした。

しかし、天下の五中生になつた喜びと誇りは大きかつた。毎日がただ楽しかつた。担任の谷鼎先生が、少年老い易く学成り難し、

過 渡 期

息子がもらつてきた紫友会名簿をみて、女房口く。「あなたダメねエ、のつてないわよ。どうしたの。」「そうか、おれもすつこけてたもんで、学籍簿がどこかへいっちゃつたらしい。旧制の最後で、ズルズル高三になつたのはいいが、ノイローゼなんだな。沢登先生という校長さんに、旧制で卒業ということにしてもらつてやめちゃつたからね。大学入學資格検定で乗りこえたんだが、ドサクサまぎれで苦しかつたなあ。別にかまわんよ。」

◇

◆
診断士仲間の月例会が約十年。ウラ芸の僕のテーマはマイクロもよいがマクロの方が気が向く。当番の九月は、「技術革新の方向と企業への波及」をレポート。エネルギー、情報素材、ライフサイエンス、どの分野も戦争をはさんで五十周期の今は過渡期。バラ色の夢

は期待してこなかつたが、二十五年勤続も、六十才定年延長もあまりうれしくない。
小はメ・ハ・マラの不如意から、大は北方やアラブ地域のキナ臭さまで、気がかりの種もつきない。所詮、昭和ヒトケタ族の中途半端、過渡期でスリ切れ、使い捨てが運命かも知れぬ。お互い自愛、自重しましょう。

思 い し く ま に

堀 敬 明

五中に入り、途中小石川高校となり、六年間も在學し卒業したのに、特に印象に残る様な想い出が浮んでこないのです。こんな事を書くとお先生にはおこられるのですが、皆よい先生にめぐまれた事に感謝していますが、一年に入學したときの受持の成田(英)先生と卒業時の受持の故山川先生の御二方の名前と顔がながるだけです。私自身がほんやりと何となく在學していたと云う所謂、その他大勢の部類であつて、ずるずると六年間を過し

一寸の光陰慚んずべからず……とお教え下さつたとき、「君たちは何の気なしに聞いているが、へ本当だよ。」と仰言つたお言葉の真実を、五十歳に達した今になって、ようやく噛みしめている此の頃はである。

細 井 弘 充

坐禅会の途次、吉祥寺で下車する機会があつた。駅前帯の何という変りよう。四十年証券不況の時は、木造二階の窓から、すぐ前の山一証券の人の出入りを見下して、明日はウチかと金庫の鍵をこねまわし、帰つてこない営業の連中に気をつかつたのも夢のようだ。大家さんの酒屋は、踏切り脇にそのままだが、木造の店は五階建。「主人が亡くなつた時より、皆さん年配になつてしまわれて。」といわれた山川先生の奥さんのところも、見える様に開けモダンに改築されていた

食べられなかつた事。更に小石川に移つてからは、すぐそばの小石川植物園に金網の破れから入り、よく尿寝をしていた事です。そうそれでも修学旅行として伊豆大島へ行つたことをおぼえています。三原山の上まで皆で登つた事を。でもやはり、何といつても印象深いのは、優れた良いクラスメートと一結に生活が出来たことです。良くノートを借りましたし、勉強も教わりました。私ごとになりましたが、幸か不幸か、小学校入學より大学を卒業し更に大学の研究生とし期間を含めて二十五年間学生生活を送りましたが、とくにこの印象が強いです。学生生活は勉強を教わることも大切ですが、良き友にめぐまれることが如何に大切なことであるかの感が強いのです。

青春の証し

松村基生

旧都立五中（あえて、こう云わせてもらおう）時代の思い出は、私にとって、青春の、唯一の証明だ。

終戦後、途中退学し、以来、これといった学校に進学しなかった私にとって、五中時代の数年間は、なんと楽しく、夢見心地の場所であったことか。

まず、ピッカピカの新学一年生。
他校とは違ったハイカラな制服とランドセルノ名前を彫ってくれる万年筆屋ノいまは珍しくもないが、階段型の教室ノ、化学実験室での爆発さわぎノ、日本初空襲で青空に描かれた飛行機雲の美しさノ

そしてまた、できの悪い私だったが、古畑和孝君、早坂忠君らの、これはもう天才かと思える諸兄に、いつのまにか親しくしてもらったこと。私程度の字力だった親近感からか（失礼ノ）萩原正君と無二の親友となったこと。

やいく人かの旧友に再会し、あらためてそのことを思ったのであった。なにもそうむずかしく理由づけることもないではないか、という気もしないではないが、私事を語るのを許して頂ければ、私の青春時代の、今にして思えば、己ひとりにかまげざるをえなかった一時期が、他者に対する人間的非礼と無理解を重ねさせ、そのことが悔いとなって残り、出席をためらわせたのである。にもかかわらず遠路上京したのは、おそらくは川野先生とその周囲の旧友達へのなつかしさに甘えてのことであった。

私はその集りで、先生の声を聞きつつ、ゴリキーが「追憶」の中で描いているチェホフのことを思い、旧友の一人と野間宏氏を訪ねた夜をじつにはっきりと思い出したのである。そしてその夜との関連でもあったろうか、南欧からの帰路、車窓越しに眺めた夜の雨に打たれる黒くぶかっこうなパリの石の建物をも思いだしていたのである。機能性だけからいえば、あるいははるかに近代建築におとるかもしれないその古ぼけた石の建物はしかし、人間とその生活についてたえず根源的

と。古畑君には、本が乏しくなった当時、オヤジさんの書庫から持ち出した？「新青年」などを、何冊も貸してもらったものである。当時は、まるでエロ写真のように、コソコソ交わしたものだ、そのスリルノ（おかげで私はすっかりミステリーマニアとなり、新聞記者となった今日でも、ミステリーじみたナンリオや小説を、本職のかたわら書いているのです）

駕籠町の本校が焼失し、滝野川、小石川、

同窓会を思う

望月通

同窓会の通知をいどこか受けながら失礼しつづけてしまったのはなぜだろうか、と思う。

今年春、退官される川野健二郎先生をかこむ集りに、じつに二十数年ぶりに出席し、先生

な問いを発しながら、他面、そのためにこそすべてを相対化する寛容な精神の一端を示していた。仕事と生活が最近私に求めているのもこれであるように思いながら、私はそれへの遠い道のりを感じている。

ひとつの偶然にすぎない同窓というわくの中にも充ちているにちがいない人間生活の多様性への開かれた精神との出会いによって、その道のりがいくらかでも短縮できればと思っている。

航空研究会

森本時夫

空への莫然としたあこがれを抱いていた小生は、入学して間もなく、「グライダーに乗れる」航空研究会に喜び勇んで入会した。講堂二階、階段わきの小部屋がその本拠地であった。

放課後、休口等、大空への雄飛を夢見る同好のメンバーはこゝに集い、あるいは操縦の基本を、あるいは整備の実務を、年令相応に一步一步身につけて行った。

一連の活動のうち、今でもなお強烈な印象として残っているのは、昭和十九年の冬休みに参加した、赤羽、荒川の河原での滑空訓練

（現在の小石川高校ではない）と転々とし、戦争の重みは何も知らない中学生の肩に、それとなくかかってきた頃も、私は絵画部に入っていて、終日、クラブ員とともに、仏像画の模写に熱中していた。

単純なものではあったが、毎日毎日が充実していた。

小手先の芸ではあったが、私はすこしばかり、絵がうま、在学中、一寸はハナを高くしたのは、この時ぐらいいのことであろう。

それにしても、辺り一面焼けはなたれ、高い当時の小石川の校庭から見た、あの太陽の異様なばかりの大きさ、輝き、あれはいったい何だったのでしょうか？

の思い出である。何しろ、生れてはじめて地面をはなれ、自力で大空高く（さ）舞い上ったのだから、当然なことかもしれない。

早朝、格納庫に集合して、まず愛機ブライマリー（開拓号、雄飛号と記憶している）の整備。葦が一面に立ち枯れている滑空場への運搬。滑空場の整備の後、待望の訓練開始。太いゴム索を何回も引いてやっと順番が廻ってくる。ゴム索が張られ、操縦席での緊張の一瞬。アンカーが解放されて何Gかの加速度を背中に感じ、わずかに何種か空へ上ってすぐ着地。訓練はこのくりかえしである。

何日目かになると、次第に自信もつき、指導先輩の注意もうるさく感じられる。

ある日、たまたま風の具合もよく、「今日こそは」と意気込んで操縦桿をにぎった。いつもの通り滑空が始った直後、先輩の注意を無視して一寸操縦桿を手前に引いた。機は軽々と空高く登って行くではないか。「やった」と鼻を高くした次の瞬間、周囲の景色がすべて静止したように見える。何のことはない。失速である。そのまま地上に激突。どの位の空白時間だったろうか。背中を叩かれて我に帰り、大変なことになったと大いに反省したがすでにあとの祭り。幸い機体の破損も少なく、小生自身もショックだけでした。

以後、戦争の激化と共に航空研究会の活動もなくなり、やがて転校などもあって小生の大空指向は転換を余儀なくされてしまった。

肝心の「航空研究会」については、残念なこと小生の手元に全く資料もなく、当時のメンバー、指導していただいた先輩等、はっきりした記憶がない。どなたか思い出して下さいれば幸いと思い、拙文をしたためた次第である。

富士の演習場のハプニング

山田康弘

昭和十九年の夏、我々都立第五中学校二年生約二百五十名は、入校以来数カ月の軍事教練の成果を試さんと勇んで富士の裾野に向った。広大な演習場の一角に質素な木造の兵舎が六、七棟も建っていたであろうか。この「日輪兵舎」に寝泊りして、朝の体操、軍人勅諭唱和、昼の原野での戦闘訓練を繰り返す毎日であったが、戦局は愈々急を告げ教練にも緊張感が漲っていた。

そんな或る日、一口の演習が終って一同隊列を組み、野中の一本道を帰途についた時のことである。殿をうけたまわる我が組が兵営の門に近付いた頃、何となくうしろがザワザワと騒がしい。何事か、と振り向いた小隊長、やにわに大声で「駈け足」と命ずるや自ら全速で走り始めた。しかし生憎、道は狭い切り通しのため、すぐに前のD組に追いついてしまつて先へ走ろうにも走れない。そこ

へ仔牛が一頭。必死で我々の隊列を押しつけて駆け抜けて行く。「異常事態発生」と直感した瞬間、堪り兼ねた隊列の最後尾から「暴れ馬だ」という悲鳴。途端に現場はパニック状態。先を争って兵営の前庭に飛び込んだが、どうしたとか馬も、挽いていた壊れた荷馬車を跳ね上げながら後を追って門の中に入ってくるではないか。さあ大変、一同散り散りに逃げる。私は咄嗟に左手の兵舎と兵舎の間の狭い路地に走り込んだ。ところが又々どうしたとか、馬は私の後を追って来るではないか。今や追われているのは私一人。すぐ背後に馬の荒い鼻息、蹄の音、ガラガラ、ドーンという荷馬車の地響きが迫って来て生きた心地もない。このまゝ、真直ぐ走って行けば、とても馬にかないはしない。何とかジグザグにと焦るが、建物に挟まれていて横にか

わすことも出来ない。漸く角を曲れたと思つ

たら、何と袋小路で奥は行き止りだ。馬はなおも追ってくる。万事休す。観念した時、偶然にも右手に建物の入口が。夢中で飛び込むと、馬は私をかすめるようにして、そのまま直進して行った。正に間一髪。助かった。

それにしても馬は、どうしてこんなところまで……………
後刻、分ったことだが、奥の突当りは厩で、暴れ馬はそこに飼われていた馬だった。

一生徒の断想

東郷昭郎

「このお(オブ)はなんのオ(オ)ですか?」「……「わかりません」、「つぎのひと」…………「目的の。です」、「ちがいます、つぎ」…………「わかりません」、「わかりません」、「同格です」、「そうです。…の先行詞はなんですか?」…………「ザ・ソン(the son)です」…………「だからあなたは損ばかりしてるんです」…………「何」。

といった具合。矢次ぎ早やに生徒は立たされてゆく。さながら、ダダダダと機関銃になぎ倒されてゆくといった状態。そのまま立たされてしばらく立っていると、「なにをばや

ぼや立っているんですか」といった毒舌が教壇からひびいてくる。授業が終ると教室の戸を閉めながら、そこで又、捨てぜりふが飛ぶ。「こんどこんなに出来なかつたらひどい目にあわせてやるから」。残された二年B組の教室は緊張の一時を終えて、呆然自失、寂として声なしといったところ。高二・新学期早々の菊池先生の授業でした。

それから二年後、先生の最後の授業(F組)で「あなた方はこの二年間よく私についてきて呉れました。私が教えられるものは全部あなた方に教えてしまいました……………」と云わ

れた時、二年前の先生の決意がはじめてよみとることができ、われながら迂闊だった次第です。

卒業式を終えたあと我々クラス仲間二、三人で最後の挨拶のため職員室をのぞいてみました。先生の後姿は寂しそうです。二年前あれ程冷酷苛酷?だった先生とは想像も出来ない程謙虚な物腰で立ち上がられ、「よくやってくれました。ありがとうございます。私もこの学校を去ります」と深く静かに頭を下げられ、眼には涙さえうかべて居られる様子で、私共はなにも云えず感極まって立ち去りました。

はじめは恨みながら、次には少しずつやり甲斐を覚えながら、最後には大きな感動を与えて下さって、教育家であると同時にすばらしい芸術家とすら感じとれる方でした。

小石川には沢登校長(私には卒業後のふれ合いの想い出の方が多いのですが)をはじめ心の深みの中から指導下さった川野先生、シャープな真田先生、いつもかわらない温顔の今はなき山川先生、五中のシンボルともいえるスマートな田中光一先生……個性ゆたか

な先生方に恵まれたこと。ひとりひとりの先生方のことを今も鮮明に思い出せることは大きな喜びです。そして、それらのことを五人の子供達に語ることを誇れる年令になりました。

編集後記

案ずるより生むが易し、社会の中核で活躍し多忙な毎日を送っておられる同窓生各位にとって、遥かに過ぎ去った昔の時代の原稿依頼に、果して応じてもらえるや否や、全く分らなかった。ところが蓋をあけてみると早速、先生方も含めて四十余編の作品が集まった。

各編とも、我々が困難な状況下で生きぬいた生活を夫々の角度で捉えており、或いは共通の体験を改めて共感し、或いは忘れていた記憶を呼びさましてくれた。

各編は戦争中及び戦後に中学・高校時代を送った各人の生々しい生活が生き活きと描かれ、特殊な体験として当人達が語らなければ分らない、その時代の少年達のいわば貴重な生活記録とも言うべきものとなった。

呼びかけの期間が短かったに拘らず、早速ご協力頂いた恩師の方々・同窓生各位に深く感謝すると共に、この小誌が我々をむすぶきずなの一助となれば幸である。

小林三郎君の本文の主役である「一冊の名簿」のコピーが同封されてきました。なつかしく、幹事一同奮い合いで見入った事でした。次回名簿の作成には是非役立たせて頂きます。

昭和五十六年十一月二十七日発行
「紫水」創刊号発行委員会

石田 雅男 神崎 彰

大島 達夫 木島 宏

大山 忠郎 佐々木 守

小野崎順正 田口 一文

編集委員

木島 宏

千葉市園生町六七―二七

電話 ○四七二一五三〇二六〇

小野崎順正

東京都目黒区碑文谷二一四一七

電話 ○三二七二一九八六八

大島 達夫

市川市大野町二一―一五八一三

市川パークハイウエイ六〇九

電話 ○四七三三三七一〇〇七



23年5月26日 三浦半島にて



24年秋 大島にて

年 表

昭和十九年度

- 4・1 入学式
- 多摩御陵まで夜行軍
- 御殿場で野宮訓練
- 疎開で生徒数減少
- 空襲のためしばしば授業中断
- 防空当番のため交替で宿直

昭和二十年度

- 4・13 大空襲で校舎焼失、休校
- 4・25 明化国民学校に移転
- 5・22 E組有志が紫誠隊を結成
- 6・5 本郷湯島の焼跡整理作業
- 三橋正明先生出征
- 井上宗助校長転任
- 6・30 沢登哲一校長着任
- 五クラスから三クラスに組がえ
- 7・6 田中光一先生出征、送別会
- 8・15 御殿場板妻廠舎で野宮訓練
- 8・15 終戦の放送
- 休校
- ・なぜ戦争に敗れたか、日本はどうなるかの討論しきり

11・12 滝野川第一造兵廠に移転

- 運動会、二年生チーム対教師チームのサッカー試合
- 1・25 隠匿物資摘発闘争の目撃談を東京新聞が取材
- 1・26 消費組合による鯛の配給、朝日新聞が取材
- 1・27 保護者会。この日から臨時休校
- 1・28 バザー

昭和二十一年度

- 6・3 この週から月曜、火曜も休校
- 6・16 休校
- 6・26 学期末考査
- 11・13 同心町の小石川高等小学校に移転
- 11・23 移転祝賀式
- 11・24 創作展
- 12・2 豊島園へ遠足
- 12・19 学期末考査
- 1・8 列車大削減、学生定期券使用停止
- 1・26 父兄会
- 1・31 全校生徒に2・1ゼネストの説明
- 2・10 愛校運動(校内の清掃と用具の保全)
- 3・13 学期末考査
- 3・18 帝室博物館を見学

昭和二十二年度

- 5・1 志学会第一回例会
- 7・4 芸能祭
- 7・12 学期末考査
- 10・4 創作展
- 10・20 臨時試験
- 10・29 久里浜へ遠足
- 11・5 国立博物館を見学
- 11・15 GHQの校内視察
- 11・18 模擬試験
- 12・8 学期末考査(停電多く一日おき)
- 五中蹴球部が東京代表として全国大会に出場
- 1・12 模擬試験
- 2・10 知能検査
- 2・23 新制高校の校名問題について報告
- 2・24 学期末考査

昭和二十三年度

- 4・23 自治組織原案作成委員会
- 5・3 教育委員会法案反対運動について説明
- 5・4 文科系と理科系に組がえ
- 5・5 新制都立第五高等学校開校式
- 5・6 自治会委員選挙
- 5・8 教育委員会法案反対運動の生徒大会。

- 生徒代表がGHQ、国会、放送局、新聞社へ働きかけ
- 5・14 教育委員会法に反対する生徒の意見を「私達の言葉」で放送
- 5・15 全校自治会で風紀委員制度の新設等を決定
- 5・24 「五高壁新聞」発行
- 5・25 風紀委員設置問題で全校自治会が不信任
- 5・28 規約修正委員会
- 5・29 各学級自治会で自治委員選挙
- 6・9 「五高新聞」第一号発行
- 6・12 父兄会。全校自治会
- 9・9 新しい自治会規約を作成
- 9・9 創作展、芸能祭、運動会の開催について全校投票の結果すべて否決
- 10・2 「五高新聞」第四号発行

昭和二十四年度

- 4・ 週一回のクラブ活動
- 五日制実施
- 4・22 第一回全校連絡会議
- 5・30 新規約にもとづく紫友会予算小委員会
- 7・15 「五高新聞」第五号発行
- 9・22 「五高新聞」第六号発行

- 10・8 「五高新聞」第七号発行
- 10・8 創立二十周年記念行事、創作展、芸能祭、運動会
- 11・2 3 三年生、二年生大島へ遠足
- 11・21 「五高新聞」第八号発行
- 1・28 都立小石川高等学校と改称
- 2・15 「五高新聞」第九号発行
- 3・1 卒業式

校歌

作詞 伊藤長七
作曲 北村季晴

1. 豊葦原の中原と 開きましけん日本武
尊のみいつ吾嬬路に 古りし歴史は二千年
今將た仰ぐ帝城の 武蔵の国ぞ大いなる
2. 流れも清き多摩川の 水にあらいて生れたる
男心は東海に 聳えて高き不二の山
曙近き人の世の 彼方の空ぞなつかしき
3. 豊島の里に程近く 樹立も深き岡の辺に
結ぶや少き人情 吾学びやの開拓に
理想の鍬を振り上げて 二つの腕の勇む哉
4. 源遠き文明の 科学の道に分け入りて
一もと咲ける野の花の ゆかりの色を翳す時
立つるやここに創作の 真理をきそう志
5. 菅の荒野を飛ぶ鷺の 羽風も高き飛驒の山
白雲遠き高原に 行く手の森を眺むれば
小草の露に命あり 吾がふむ土に力あり
6. 平和の光今更に 五洲の海に輝きて
恵の波のいやひろく 八洲の外に布くところ
振わんかなや開拓の 吾が校友の精神を